

詩編 62 : 6~13

マタイによる福音書 7 : 24~29

「人生を建てる土台」

【招詞】 申命記 6 : 4~5

【讚美歌】 27 「父、子、聖霊の」

【詩編交読】 詩編 143 編

【赦しの宣言】 イザヤ書 55 : 7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】 50 「みことばもて主よ」

【祈祷】

【聖書】 詩編 62 : 6~13、マタイによる福音書 7 : 24~29

【説教】 「人生を建てる土台」

< 「山上の説教」の締め括り >

「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」

そのようなイエスさまの御言葉から始まった「山上の説教」の、最後の締め括りの御言葉が、今日の聖書箇所です。

最後にイエスさまは、家と土台のたとえを話されました。

イエスさまのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。それは、雨でも、洪水でも、激しい風の吹く嵐でも、倒れない。一方で、イエスさまのこれらの言葉を聞いて行わない者は、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。それは、雨や、洪水や、嵐によって、倒れて、バラバラに壊れてしまう。そう言われました。

ここで、家というのは、わたしたちの人生のことです。わたしたちの存在そのもののことです。そして、わたしたちは、その自分の人生の土台を、どこに据えるか。自分の心の、命の、人生の拠り所を、どこに置くか。そのことが問われています。

それによって、どのような苦難が襲い掛かっても、倒れずにしっかり立ち続けることができるか。あるいは、倒れてバラバラに壊れてしまうか。そのような違いが起こってくる。そうイエスさまは教えておられるのです。

今日の 7 : 24 には、「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている」とありました。

「わたしのこれらの言葉」。それは、マタイによる福音書の 5 章から 7 章までかけて、イエスさまが「山上の説教」で語られた、すべての御言葉のことです。

イエスさまは、多くのことを、「山上の説教」でお語りになりました。

心の貧しい人々は、幸いである。腹を立てるな。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。「天におられるわたしたちの父よ」と、神さまに呼びかけて祈りなさい。明日のことまで思い悩むな。人を裁くな。求めなさい。…他にも、多くのことを語られました。

そして、これらのイエスさまの言葉を聞いて行うこと。それが、岩の上に家を建てることだ。それが、どのような苦難や荒波にも、倒れない人生を築くことだ。

そう言われたのです。

<イエスさまの言葉を聞いて行う？>

イエスさまが語られた言葉を聞いて行うこと。それを、どのように思われるでしょうか。大変なことに感じられるでしょうか。とても難しいことに思えるでしょうか。

自分は、そんなに正しく、立派には生きられない。それに、そんな風に生きるのは、努力と我慢の連続で、とても大変そうだ。素晴らしい生き方だろうけれど、自分らしさを押し殺して、なんだか不自由な生き方に感じる。…そんな風に思われるでしょうか。

もし、そう感じるのなら、それは「山上の説教」を、守るべきルールとして、道徳的な教えとして、聞いていたのかも知れません。

確かに、そのような、正しく立派な生き方を土台とすることによって、自分の人生を建て上げようとする人もいるかも知れません。でも、そうであれば、その土台が倒れるか、倒れないかは、自分次第ということになります。もし、すべきことが出来なかったら、その土台は崩れる、ということです。それは、盤石な岩とは言えません。

では、家が倒れないように、イエスさまが言われる「わたしのこれらの言葉を聞いて行う」とは、どういうことなのでしょう。「山上の説教」を聞いてきたわたしたちは、何を、どう行えばよいのでしょうか。

<あなたがたの天の父>

イエスさまが「山上の説教」で、これまで教えてきてくださったこと。それは、確かに命令口調で、ああしなさい、こうしなさい、と聞こえたかも知れません。

でも、わたしたちは、まず「山上の説教」で、一番最初に語られた御言葉に、立ち帰りたいと思うのです。5:3には、こうありました。

「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」

イエスさまは、はじめに、わたしたちのことを「心の貧しい人々」と呼ばれました。

つまりそれは、わたしたちが、自分の中に、頼れる富を全く持っていない。自分を支えるための拠り所が、一切ない。自分で自分を生かす力が、何もない、ということです。わたしたちは、自分の力では、心掛けでは、立派なことも、正しいことも、何をすることも出来ない、ということです。

わたしたちは、何も持っていない、「心の貧しい」者です。そうであるなら、わたしたちは本来、物乞いのように、誰かから与えてもらうことによってしか、生きられないのです。

神の御子イエスさまは、はじめから、そのような、わたしたちの弱さを、無力さを、貧しさを、すべてご存知です。だからこそ、わたしたちに、生きるために必要なすべてを与えるために、天から降って来られたのです。

イエスさまが、貧しいわたしたちに、罪の赦しも、永遠の命も、復活も、希望も、御自分の命を丸ごと、与えてくださいます。わたしたちを生かすために、御自分のすべてを与え尽くしてください。そのようにして、罪の悲惨の中に倒れているわたしたちを救い出し、神さまの恵みと栄光に満ちた、天の国をくださいます。

「天の国はその人たちのものである。あなたたちのものである。」いただけるもので、これ以上に良いものはありません。神の御子イエスさま以上のものはありません。

でも、それを、わたしたちに与えることこそが、天の父なる神さまの御心だと言ってください。わたしたちのことを、天の父なる神さまが、それほどに愛しておられるから、それらは与えられる、というのです。

だから、心の貧しいわたしたちは。イエスさまを与えられたわたしたちは。まことに、幸いな者なのです。

しかも、父なる神さまは、わたしたちが、愛されるに値するから。子としてふさわしいから。素直で誠実な者だから、愛してくださるわけではありません。

「心の貧しい」わたしたちだったのです。何も持たない、愛も、赦しも、誠実さも持ち合わせていない、そのようなわたしたちだったのです。

むしろ、造り主である神さまに背き、自分の貧しさも自覚せず、父なる神さまにより頼むこともしなかった。挙句、他の虚しいものを神のようにあがめ、父なる神さまを裏切り、隣人を愛することも、愛されることも出来なかった。

そんな、罪の悲惨の中に生きていた、わたしたちだったのです。

それでも、神の御子イエスさまが、「山上の説教」を通して語ってこられたことは。

独り子なる御子イエスさまをお遣わしになった、全能の造り主なる神さまが、そのようなわたしたちの、父なる神さまとなってくくださる、ということです。父と子の、親しい愛の交わりを求めてくださる、ということです。

そして、父なる神さまは、子なるわたしたちを、罪人であるにも関わらず、価値あるものとし、重んじ、憐れみ、どこまでも愛しておられる、ということです。

だから、父なる神さまは、遣わされた御子イエスさまによって、わたしたちの罪を赦し、神さまと共に生きる、永遠の命を与えてくださったのです。

こうして、父なる神さまの愛は、イエスさまを通して、わたしたちに現わされ、すでに成し遂げられ、今ここに、あるのです。

何かと引き換えに、与えられるわけではありません。条件や資格を満たすことで、愛してくださるわけではありません。

イエスさまの御言葉を聞いている、今ここで、わたしたちの前に、わたしたちの天の父なる神さまの愛が、すでに差し出されているのです。先に、ただ与えられているのです。

だから、イエスさまの「あなたがたは幸いである」との御言葉に、生きること。イエスさまによって差し出された、この父なる神さまの愛を、受け取ること。この方を、心から信頼し、この方を拠り所とし、この方の愛の中に立って、人生を歩むこと。

それこそ、わたしたちが、イエスさまの言葉を聞いて行う、ということなのです。

<父なる神さまに信頼する>

でも、わたしたちが、そのように父なる神さまの愛を信じ、この方に心から信頼し、より頼み、求めるようになるためには。まず、わたしたち自身が、本当に何も持っていないこと。本当に貧しい者であること。自分の力では自分を救うことが出来ない、悲惨な罪人であることを、心の底から認めなければならないでしょう。

謙遜程度に、わたしは「貧しい者です」とか、「無力で、小さな者です」とか、「わたしは罪人です」とか、口にすることがあるかも知れません。

でも、本当にそう思っているか。本当に自分の無力さを知っているか。本当に自分の罪に絶望しているか。それが、ここで問われてくるように思います。

天の父なる神さまに、すべてを委ねる。すべてを任せる。すべてをより頼む。

それは、自分やこの世のものには、一切頼らず、何の拠り所も置かず、保険や安全地帯のようなものも、まったく持たないということです。

もし少しでも、自分で何とかしようとしている領域、何とか出来ると思っている領域があるのなら。そこは砂場であり、わたしたちは、その上に家を建てているのです。

わたしたちは、目に見える安心を、つい手放せなくなってしまう。自分で大切にしてきたものを、積み上げてきたものを、つい拠り所にしてしまう。

神さまに依り頼むと言いながら、岩の上に両足を乗せ切ってしまうことができず、片足を、慣れ親しんだ砂の上から、動かさないでいるのです。

岩の上に両足を乗せていれば、岩はびくともしないので、わたしたちは安定して立っていられます。でも、片足でも、さらさらの砂の上に置いているなら、それはすぐに不安定になってしまうのです。

わたしたちは、もっと、天の父なる神さまを信頼しなければなりません。でも、それは、わたしたちが努力して信頼する、がんばって信じる、ということではないのです。

信頼というのは、強制されて、努力して、するものではありません。不安を覚えるような、不誠実そうな相手を、無理に努力して信頼する、なんていうことは出来ません。

相手が確かな人だ、誠実な人だ、真実な人だと知ることによって、わたしたちは、相手を本当に信頼し、委ねたり、頼ったりできるようになるのです。

ですから、わたしたちが、神さまを信じられるかどうか。神さまを信頼できるかどうか。

それは、神さまご自身がどのようなお方であるかに、かかっているのです。

だから、天の父なる神さまは、御自分の誠実さを、その愛を、必ず御言葉を成し遂げられる、真実なお方であることを、御自分の御子イエスさまによって、わたしたちにはっきりと示してくださったのです。

父なる神さまは、御子イエスさまの命を与えるほどに、わたしたちを愛しておられます。だから、父なる神さまは、イエスさまの十字架の死を引き換えにして、わたしたちの罪を赦してくださいました。また、イエスさまを死者の中からよみがえらせることで、死ぬべきわたしたちにも永遠の命を与え、死んでもよみがえることを、保証してくださいました。

神の御子イエスさまによる、命をかけた、父なる神さまの愛の証明です。

神は愛です。これ以上に、どのような愛があるのでしょうか。この方が与えてくださるものに対して、わたしたちが、自分の中に大事に持っているものは、頼りにしているものは、どれほどのものなのでしょうか。自分を守ろうと必死になっていながら、本当に自分を救ってくれる、最も大切なものを、見失ってはいないのでしょうか。

ところで、ルカによる福音書にも、このマタイと同じ記事が書かれているのですが、そこにはもう少し詳しい記述があります。ルカ 6：47～48（新 114）には、こうあります。

「わたしのもとに来て、わたしの言葉を聞き、それを行う人が皆、どんな人に似ているかを示そう。それは、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を置いて家を建てた人に似ている。洪水になって川の水がその家に押し寄せたが、しっかり建ててあったので、揺り動かすことができなかった。」

ここには、ただ岩の上に家を建てる、というだけでなく、「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を置いて家を建てる」とあるのです。

家を建てるには、地面を、深く、深く掘り下げて、岩に至らなければならない。それほど深く、本当に心の奥底から、神さまを信頼しなければならない、ということです。

たぶん砂は、簡単に、すっと掘ることが出来るのではないのでしょうか。でもその分、洪水が来たら、簡単に流され、倒れます。

一方、岩に至るまで地面を掘るのは大変です。それでも、地面を深く掘って、岩に至って、その固い地盤に家を建てるならば、その岩は、永遠の土台になるのです。

カルヴァンという神学者は、この箇所解説で、イエスさまの語られたこと。つまり、父なる神さまの愛に信頼をおく、ということが、心の中に深く根差していないなら。それは、何の基礎もない、高い壁でしかない、と言っています。すぐ倒れるということです。

そして、「自分自身を否定するほど深く掘らない者はすべて、人間精神の虚栄や不安定に従って、砂の上に立てている」のだと言うのです。

自分自身を否定するほど深く掘って、ただ神さまにのみ信頼せよ、というのです。

それは、自分自身の存在や、価値を否定することではありません。また、自分はダメだと卑下したり、自分を辞めてしまうことでもありません。

だって、罪を犯したこのわたしを、そのまま神さまは、愛し、憐れみ、慈しんでくださったのです。わたしたちは、罪人です。しかしそれでも、わたしたちの存在そのものが、神さまの目に、値高く、貴いと言ってくださるのです。価値があると言ってくださるのです。かけがえのないものだと言ってくださるのです。

だからこそ、わたしたちを生かすために、御子イエスさまが、十字架で死んでくださったのではなかったのでしょうか。

でも、言い方を変えれば、わたしたちは、神の御子が十字架で苦しんで死ななければ、そこまでしてくださらなければ、救われない者だった、ということです。

その罪の深刻さを覚え、少しでも、自分の良い行いや、心掛けや、努力で何とかなると思っているなら。そのことによって、救いに近づけると思っているなら。それは、イエスさまの十字架を軽んじ、蔑ろにすることです。

だから、わたしたちは、自分の力を、自分の行いを、自分により頼むことを、完全に退けなければなりません。

そして、ただ父なる神さまの愛の御心によってのみ、救われることを信じ。イエスさまが成し遂げてくださったことにのみ、救いがあることを信じ。自分の救いを、自分自身を、完全に神さまの御手にお渡しするのです。

…そこでわたしたちが、神さまの御手の中で、立たせていただけるなら。ただ神さまの御業によって救われ、ただ神さまの恵みによって満たされ、ただ神さまの強さによって立たされ、ただ神さまの正しさによって生かされるなら。

わたしたちは、神さまに与えられた、まことの自分の人生を、もっと自由に、もっとのびやかに、もっと生き生きと、歩んでいけるのではないのでしょうか。

### <雨、洪水、嵐>

今日の御言葉では、「雨が降り、川が溢れ、風が吹いてその家を襲う」とありました。

わたしたちは、自分の人生に襲い掛かって来る、様々な苦しみや、悲しみや、災難、トラブルのことを思うでしょう。

わたしたちは、身の回りの色々なことに。あるいは、自分の心の中に起こる嵐に。振り回されたり、かき乱されたり、押し流されそうになることがあります。

何もないことは、あり得ません。この地上で生きている限り、わたしたちには、様々なことが起こるのです。

でも、わたしたちの家が、人生が、何事にも動かされることのない、岩の土台の上に立っているなら。確かなものに依り頼んでいるなら。倒れたり、潰れたり、壊れたりすることはないのです。固く、立っていることが出来るのです。

わたしたちが、自分の家を、岩の上に建てているか、砂の上に建ててしまっているか。それは、そのような嵐が起こるまでは、自分でも気づくことが出来ないのかも知れません。だからわたしたちは、雨や、洪水や、嵐が起こるたびに、立つべきところに立っているかどうかを、問われているのかも知れません。

また、この雨や、川の氾濫や、嵐は、この世の終わりのこと、終末の審きのことを指している、とも言われます。

その時には、この地上で、決して揺らぐことがないように見えていたものも、大きく揺り動かされ、ひっくり返され、すべてが過ぎ去っていくでしょう。そして、イエスさまが再び来られ、すべての者を、審かれます。

しかし、わたしたちが、父なる神さまに依り頼んでいるならば。その愛の中に立たされているならば。わたしたちは、最後の審判の時さえ、立ち続けることができるのです。

審判者は、わたしたちに幸いをもたらしてくださった方であり、わたしたちの罪を、御自分の命で、完全に贖ってくださったお方です。

この方によって、罪の赦しを得ている。復活の命を得ている。そう信じているわたしたちは、罪人として滅ぼされるのではなく、神の子として、御前に立たせていただくのです。

わたしたちが神さまを土台としているならば。神さまの愛に心からより頼んでいるならば。神さまが責任をもって、わたしたちを、倒れないように支え、最後まで立たせてくださいます。

#### <御言葉は実現する>

さて、イエスさまがすべてを語り終えられて、7:28~29にはこう書かれています。

「イエスがこれらの言葉を語り終えられると、群衆はその教えに非常に驚いた。彼らの律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。」

「イエスがこれらの言葉を語り終えられると」とあります。ここは厳密にギリシア語を訳すと、「イエスが、これらの言葉を終えたとき、これは実現した」と書かれています。

イエスさまが、御言葉をわたしたちに語られたとき、それはもう、実現しているのです。

「権威ある者としてお教えになった」とありますが、この権威とは、神の権威です。全知全能の、神さまの権威。「光あれ」と言われれば、光をそこにあらしめる、そのような神の権威をもって、イエスさまは語られました。

「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」

イエスさまが、わたしたちに向かって御言葉を語りかけてくださるとき、それは必ず、実現するのです。

イエスさまが、わたしたちを幸いなものとしてくださるのです。イエスさまが、天の国を、神さまの愛と恵みのご支配を、わたしたちのものにしてくださるのです。イエスさまが、御自分の十字架と復活の御業によって、罪を赦し、永遠の命を与え、わたしたちを神の子とし、すべての恵みを受け継がせてくださるのです。それは、確かに実現しました。

そして、その中で、わたしたちが「天におられる、わたしたちの父なる神よ」と祈ることも。敵を愛することも。自分を迫害する者のために祈ることも。思い煩わないことも。求め、そして与えられることも。すべてが、実現していくに違いないのです。

イエスさまが語られた御言葉は、神さまの愛の御心は、この地に、わたしたちに、必ず、実現していくのです。

ですから、わたしたちは、岩の上に家を建てます。このイエスさまの御言葉に、固く支えられて、生きていきます。「あなたがたは幸いである」と宣言してくださる、このイエスさまの御言葉こそ、わたしたちの岩です。イエスさまが告げられた、父なる神さまの愛こそ、安心して依り頼むことができる、わたしたちの土台です。

わたしたちは、この岩の上に立ち、生きている時も、死ぬ時も、揺らぐことなく、倒れることもありません。詩編 62 編に語られていた通りです。

「神こそ、わたしの岩、わたしの救い、砦の塔。わたしは決して動揺しない。」

**【お祈り】** 天におられる、わたしたちの父なる神さま

イエスさまの十字架と復活の御業によって、あなたの愛を現わし、救いの御心を現わし、誠実で真実な方であることを現わして下さったことを、心より感謝いたします。

イエスさまが、わたしたちに語りかけてくださる、「あなたがたは幸いである」との御言葉が、まことに実現していますことを、感謝いたします。

どうか、その幸いに、心から喜んで生きる者としてください。

聖霊なる神さまが、頑ななわたしたちの心を、柔らかく、新しく造り変え、あなたの愛に信頼し、あなたにのみ寄り頼み、まことの信仰を、人生の土台として生きる者、岩の上に家を建てる者とならせてください。

わたしたちの救い主、イエスさまの御名によって、お祈りいたします。アーメン

**【讃美歌】** 4 5 7 「神はわが力」

**【信仰告白】** ニカイア信条

**【十戒】**

**【献金】** 6 5 - 1 「今そなえる」

**【主の祈り】**

**【祈祷】**

**【讃美歌】** 2 8 「み栄あれや」

**【祝福】** 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン